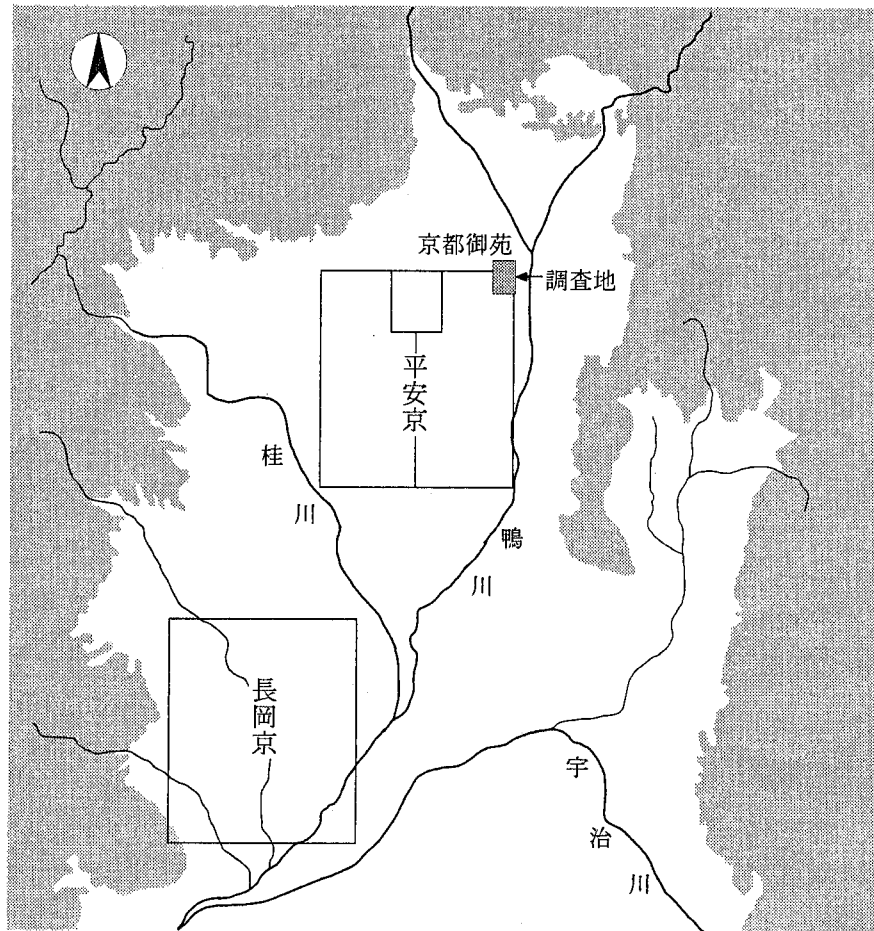


# 平安京左京北辺四坊

## — 京都御所東方公家屋敷群跡 —

発掘調査現地説明会資料 4



2000年5月27日

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

## 平安京左京北辺四坊－京都御所東方公家屋敷群跡－発掘調査現地説明会資料 4

場 所 京都市上京区京都御苑 3 (饗宴場跡グラウンド跡地)  
期 間 1999年12月 ～ 継続中  
調査面積 約1,930㎡ (第 2 調査区)  
調査主体 (財) 京都市埋蔵文化財研究所

### 調査の経過

本調査は京都和風迎賓施設(仮称)に伴う発掘調査である。建設予定地内においては過去、西北部の緑地帯部分で第1回の発掘調査(『平安京左京北辺四坊－京都御所東方公家屋敷群跡－発掘調査現地説明会資料』1998年6月13日)、北東部のゲートボール場跡地で第2回の発掘調査(『平安京左京北辺四坊－京都御所東方公家屋敷群跡－発掘調査現地説明会資料2』1998年10月24日)、饗宴場跡グラウンド北西部で第3回の発掘調査(『平安京左京北辺四坊－京都御所東方公家屋敷群跡－発掘調査現地説明会資料3』1999年7月10日)を実施し、それぞれ現地説明会を開催している。今回の第2調査区は、第3回調査地の真南にあたり、江戸時代前半期の公家屋敷と中筋通の遺構を良好な状態で検出したため、現地説明会を開催することになった。

### 調査地の歴史的環境

建設予定地は平安京の北東隅、左京北辺四坊の五町・六町・七町・八町に該当する(図1)。七町では藤原良房の邸宅「染殿」や清和上皇の後院「清和院」が推定されている。本調査区は、六町・七町に位置し、南北方向の富小路と東西方向の正親町小路が検出される地点にあたる。

桃山時代以降、一帯には公家衆の屋敷街が形成された。江戸時代の絵図を見ると、屋敷街は宝永5年(1708)の大火を境にそれ以前と以後で配置に大きな変化があったことがわかる。宝永大火以前の絵図(図2の左)では、中筋通と二階町通にはさまれた二列の屋敷地からなり、本調査区は「柳原殿」<sup>やなぎわら</sup>「櫛笥殿」<sup>くしげ</sup>付近に該当する。しかし宝永大火以後の絵図(図2の右)では、中筋通・二階町通間は一つの屋敷地となり、本調査区は「櫛笥大納言」の付近とみられる。

屋敷街は、その後も天明8年(1788)と嘉永7年(1854)に大火にあったが、配置に大きな変化はなく幕末まで存続した。しかし、明治2年(1869)の東京遷都にともない公家達が東京に移ると、ほとんどが撤去され荒廃した。その後、明治10年(1877)から数年かけて整備され、現在の姿となった。

### 検出した遺構

中央部では江戸時代前半期の遺構を、北と東では桃山時代から室町時代の遺構を調査中

である。

### ① 江戸時代前半期の遺構

中筋通の路面と東側溝（写真3） 調査区の西壁を2カ所拡張し、それぞれ中筋通の路面と側溝を確認した。路面は小礫を敷いた堅固な面をもつ。路面を形成する層は15cmほどある。上から2面目には石灰が薄く敷かれる。また最初に敷かれた面の上には焼土層が覆っている。路面は西側ほど低い。東側溝1392は幅0.6m、深さ0.3mある。両肩は石垣で護岸し、石垣は3段まで残存する。

屋敷境の塀1740・溝1604・通路F（写真6） 南北に分ける境界施設で、以北を柳原家、以南を櫛笥家と推定している。塀1740は溝を掘り底に柱を建てた「布掘柱列」と呼ばれるものであり、溝底には礎石が残存する。柱穴・礎石の間隔は1m弱で、半間で割り付けられている。通路Fは小礫を敷いた幅2m程の路面をもつが、礫敷きは堅固ではない。北にある溝1605は、路面側溝及び塀1740の雨落溝とみられる。

**櫛笥家の遺構** 建物A（写真4） 調査区の南端で検出した礎石建物で、礎石は30個ほど残る。西端と北端は礎石列から明瞭であるが、南端は樹木の保存範囲に含まれ確認できない。東寄りに竈<sup>かまど</sup>1680がある。2連以上あり、さらに南に延びる。

建物B（長屋門、写真2・3） 南北方向の建物で中筋通に面する。礎石は30個ほど残存する。幅3m（1間半）で長さ22m以上ある。南半は礎石が少ないが、便所用甕（埋甕<sup>うめがめ</sup>1582）が据えられるため、ここまで含めて復元した。建物下には礫敷面が広がる。門の遺構は南北1間分（3.2m）の柱穴底に礎石が据えられた遺構で、東にも同様の礎石がある。建て替えがあったのだろう。

建物C（写真2） 建物Bの手前に西端があり、北端は通路Fに面する。礎石の残りは良くない。南西隅に東西の礎石列があり、それが東端で南に3間分折れるため、雁行形を呈し建物Aに接続する建物と考えた。東端はY=-21,148付近の礎石から求めた。建物内部には竈1555があり、東西に6連並ぶ。その西南には土間叩<sup>どまたたき</sup>を施した面が2間四方に残存する。

建物D・E 建物Aの南西には小礫が詰まった東西の溝1090があり、これを建物の北雨落溝と考え、建物Dを復元した。礎石や柱穴は検出していない。建物Eは調査区の南西隅にある東西3間以上の礎石列から、南側に推定した。

井戸1234・1385 建物Aの東側で井戸1234を、建物Cの内部で井戸1385を検出した。建物内部には竈があるため、これらの井戸も付属して使用されたとみられる。

地下式土壇1387 建物Aの東側にあり、北側に階段をもつ。階段は5段あり、削り出して造られている。深さ1.6mある。

**柳原家の遺構** 池1685 北東部で検出した。景石・州浜はない。底には黄色泥土層が貼られている。南側は後述する土壇1475によって壊わされ、土壇内には池の景石とみられる巨石が数個投棄されていた。また池底から石仏が1体出土した。

地下式土壇1475 北西部に昇降用の階段がつく穴で、現地表から底まで3.5mに達する。

階段は5段あり、削り出して造られる。堆積層の中層には、焼けた瓦が大量に投棄され、以後はゴミ処理用の穴として利用されたことがわかる。

## ② 桃山時代・室町時代の遺構

柱列 柱穴の並ぶ箇所が数カ所あるが、建物としては確認できていない。

井戸 5基以上ある。井戸1709・1777・1799・1800・1901はともに室町時代後期に属し、円形の掘形をもつ石組井戸である。井戸1777が最も大型の掘形と石材をもつ。

土壌 東寄りで検出した土壌1780は、基盤の黄色泥土層を採取する目的で掘られた「土取穴」である。桃山時代に属し、公家屋敷が形成される以前に掘られたものである。

## 出土した遺物

現在までのところ、幕末期から江戸時代全般、桃山時代、室町時代の遺物が出土している。ただし本調査区には、江戸時代後期の大規模なゴミ処理穴や天明の大火に伴う火災整理土壌が検出されなかったため、江戸時代前期・中期の遺物が中心となっている。種類と内容は以下のとおりである。

肥前磁器（染付・青磁・青磁染付・白磁・上絵）、肥前陶器（京焼風陶器・刷毛目椀）、唐津（三島・絵唐津）、京焼（楽焼系・軟質施釉・鉄絵染付・上絵）、京・信楽系陶器（鉄絵・呉須）、信楽系陶器（<sup>すりばち</sup>搦鉢・甕）、瀬戸・美濃系陶磁器（染付・灰釉・褐釉・天目）、丹波陶器（搦鉢・甕）、堺・明石系陶器（搦鉢）、備前陶器（瓶・搦鉢）、中国磁器（青花・呉須染付・呉須赤絵）、土師質土器（皿・蓋・焼塩壺・ほうらく・風炉・火消し壺）、瓦（軒瓦・鬼瓦・道具瓦）、土製品（人形・玩具・ミニチュア・箱庭道具）、銭貨（寛永通宝・他）、ガラス製品（髪飾り）、石製品（砥石・硯など）、金属製品（<sup>きせる</sup>煙管・釘・刀子・鍵など）。

注目される遺物としては、調査区の南東隅で検出した3基のゴミ処理穴、土壌1244・1387・1432から出土した一括遺物がある。これらは17世紀後半から18世紀初頭の比較的短期間に場所を替えて掘られており、整理が進めば遺物年代の指標になるものと期待される。この他、井戸1255では石製の<sup>くりぬき</sup>剝貫井筒、集石1060からは石燈籠の笠部、池1685から石仏が出土している。

## 調査の成果

### ① 各家の範囲

江戸時代前半期の遺構については『寛永後万治前洛中絵図』（図2の左）が各家の寸法を記す点で参考になる。それを見ると、本調査区付近は「富小路右兵へ殿 十九間（1間1.96mとして約37m）」「（記載なし 直前は千種家）十五間半（約30m）」「蘭宰相殿 十四間半（約28.5m）」「志水谷中将殿 二十間（約39m）」「柳原殿 十八間（35.28m）」「櫛笥殿 十六間（31.36m）」となっている。

前半期の遺構（図3-2）をみると、GS2の2区で検出した東西柵J、柵Hと1区の

溝72、1区の柵E、それにGS4の1区中央の通路、本調査区で検出した塀1740・溝1604・通路Fが各家を分ける施設であったとみられる。そして絵図の記載からは、柵J以北が富小路家、柵J・柵H間が千種家、柵H・柵E間が園家、柵E・通路間が清水谷家、両通路間が柳原家、塀1740以南が櫛笥家に復元できる。

江戸時代後半期は、絵図では、北から富小路家・園家・柳原家・櫛笥家が南北に描かれるが、各家の規模は示していない。しかし前半期の遺構との関連でみると、GS2の2区の溝675・溝678以北が富小路家、ここから1区の柵E・柵F・溝7間が園家、ここからGS4の2区の溝970間が柳原家、それ以南が櫛笥家に復元できる（図3-1）。このようにみると、柵J・柵Eは同じ位置で石垣をもつ溝に改修されたこと、また石垣のある溝970（写真5）は大規模な土壇1455を埋めて造られたこともわかる。

各家の範囲を推定する上では、遺構から出土する家紋瓦も参考になる。図2の右に掲げた絵図には各家の家紋が描かれるが、これと同じ文様の軒瓦・飾瓦が図3-1に示した遺構から出土しており、この推定を裏付けている。

## ② 前半期櫛笥家の屋敷配置

中筋通に面する長屋門、その東側に中心的な建物A、それに雁行形に取り付く建物C・建物Dを検出した。公家屋敷の遺構が、中筋通、屋敷を分ける境界の塀・溝、井戸、貯蔵用の地下式土壇などと一体的に検出できた意義は大きい。指図などを参考にすると、大型の竈1555をもつ建物Cは下台所か料理部屋とみられ、竈南西の土間部分が出入口と思われる。竈1680をもつ建物Aは、上台所を有した建物と想定できる。

## ③ 後半期の柳原家について

前回調査した1区土壇268から柳原家の家紋「鶴」が入った大棟の飾瓦が出土した。上面には「明和八稔<sup>ねん=年</sup> 卯霜月吉日」の銘があり、明和8年（1771）の新築を知る資料となった。しかしこの時の建物は天明8年（1788）年の大火で焼亡したようで、それは土壇268から多量の火災遺物が出土したことでわかる。柳原家は宝永5年の大火（1708年）でも罹災<sup>りさい</sup>したとみてよいので、明和8年の新築はそれから数えて63年目、天明8年の罹災はさらに17年目のことであった。

地鎮具である賢瓶<sup>けんびょう</sup>は、前回公開した1区の竈140の下から出土した。竈140は能舞台に伴う埋甕74の下にあり、この結果、賢瓶の埋納→竈の設置→能舞台の造営という関係が判明した。賢瓶を埋納した時期は、宝永大火の後、明和8年の新築時、天明大火の後、この3者に絞られる。この中では大規模な配置替えを伴った宝永大火後の新築が、最も可能性が高いのではなかろうか。

また前回の現地説明会では、後半期柳原家の庭園遺構として池25を公開したが、本調査区においても池の東側を検出した（池1200、図3-1）。中島をはさんで池が全周し、東端には長方形の漆喰槽がある。池内には踏石が4石残存する。新期になると、池は埋められ、築山として利用された様子が周囲の竹の生垣から推定できた。

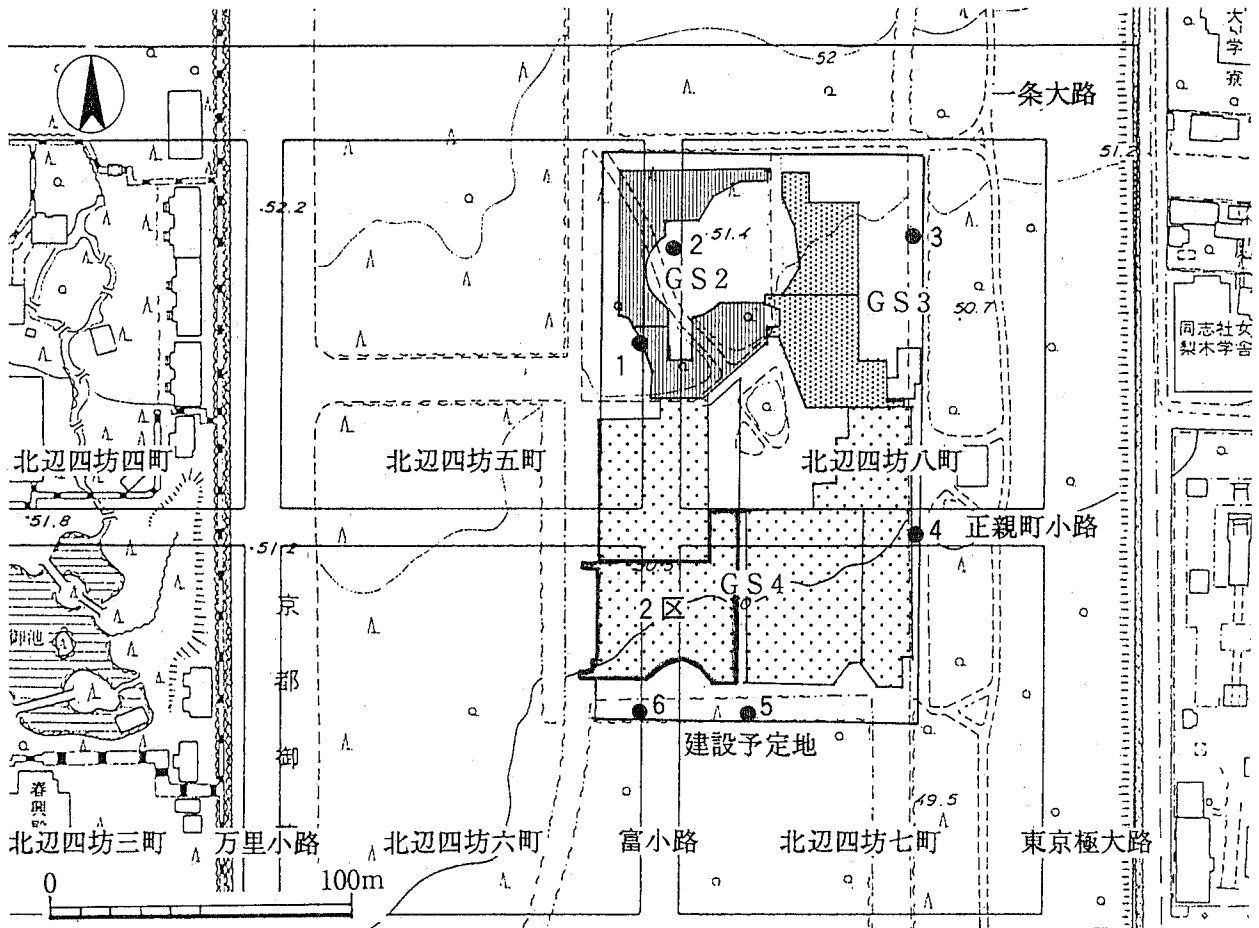
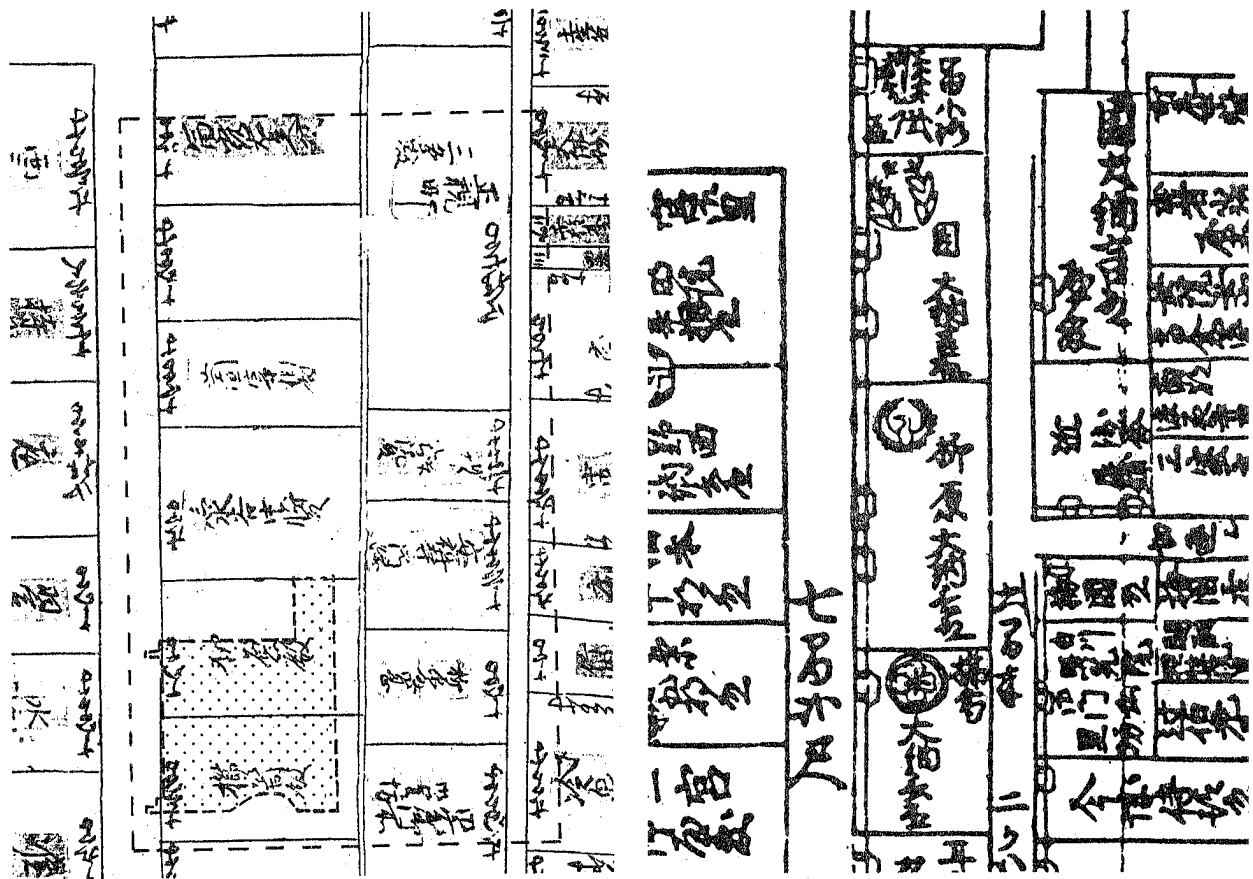


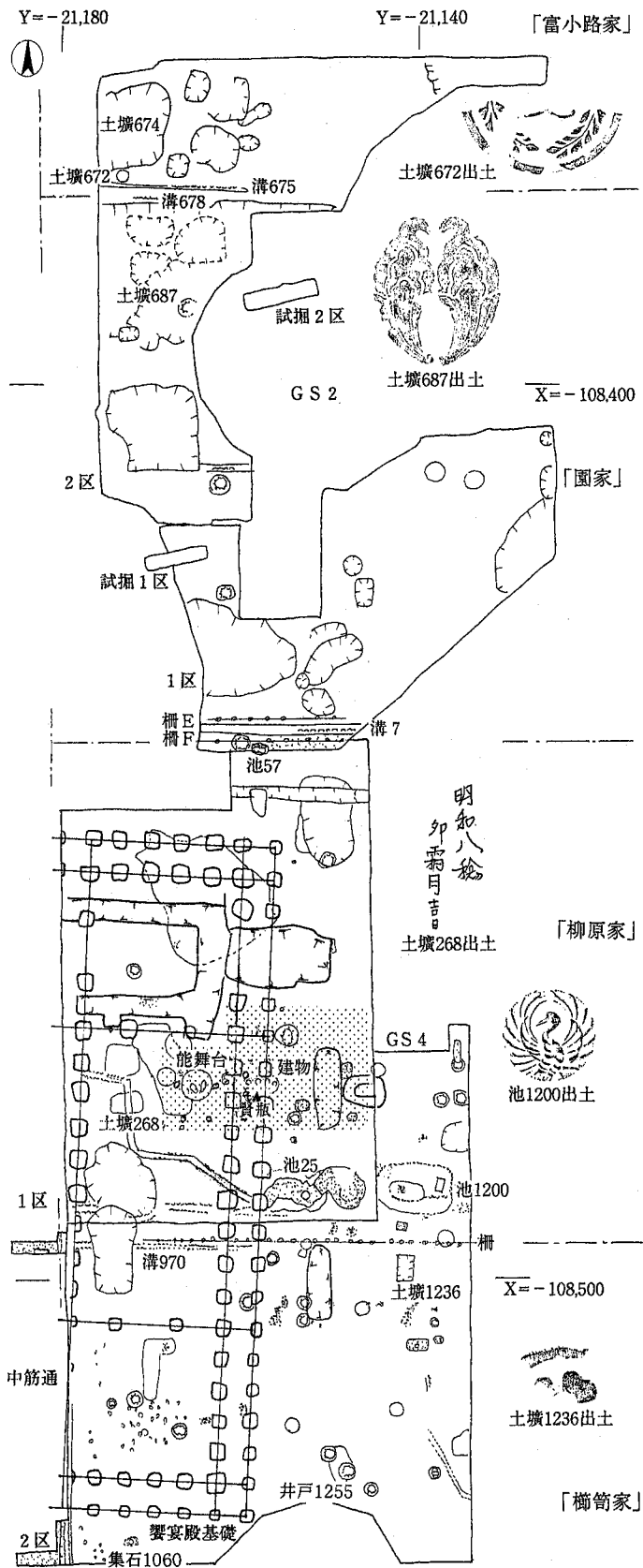
図1 平安京の条坊と調査地 (1 : 2,500 ●印はGS1 試掘調査位置)



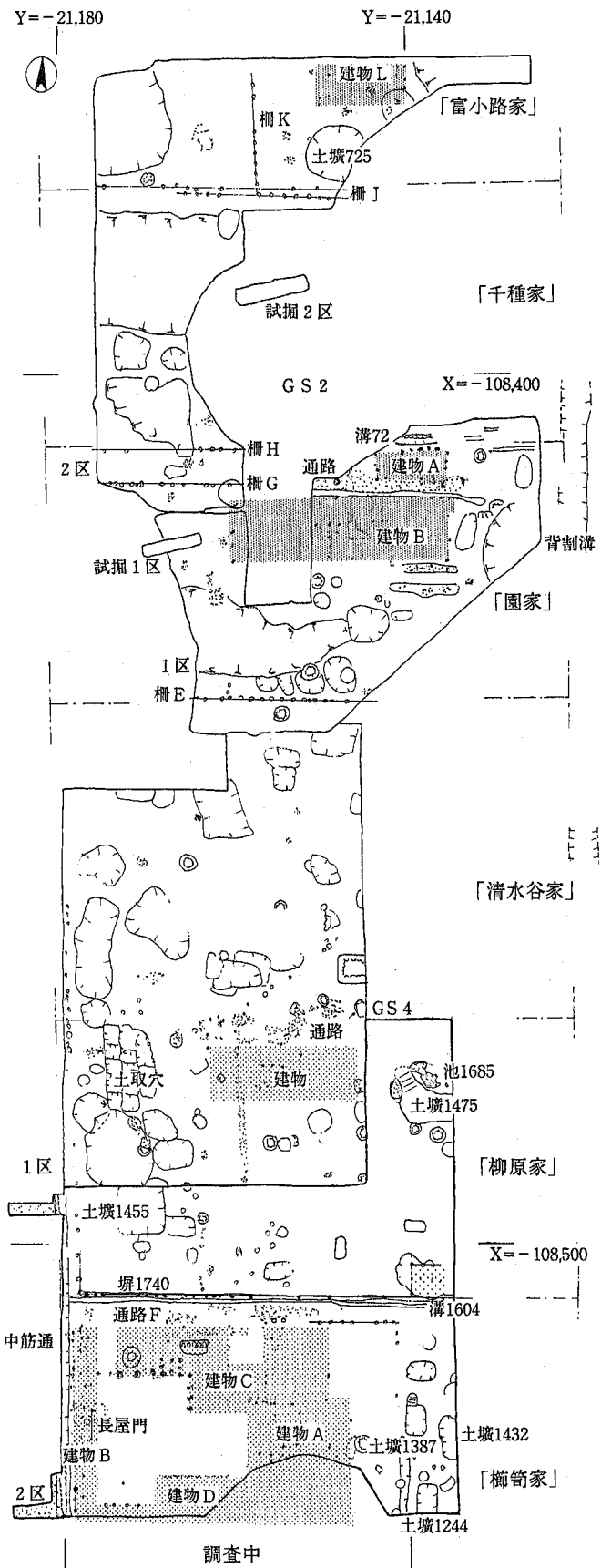
『寛永後万治前洛中絵図』寛永19年 (1647) 頃  
点線内が建設予定地、網で本調査区を示す

『内裏ノ図』宝永6年 (1709)  
各家の家紋を描く

図2 江戸時代絵図での調査地付近

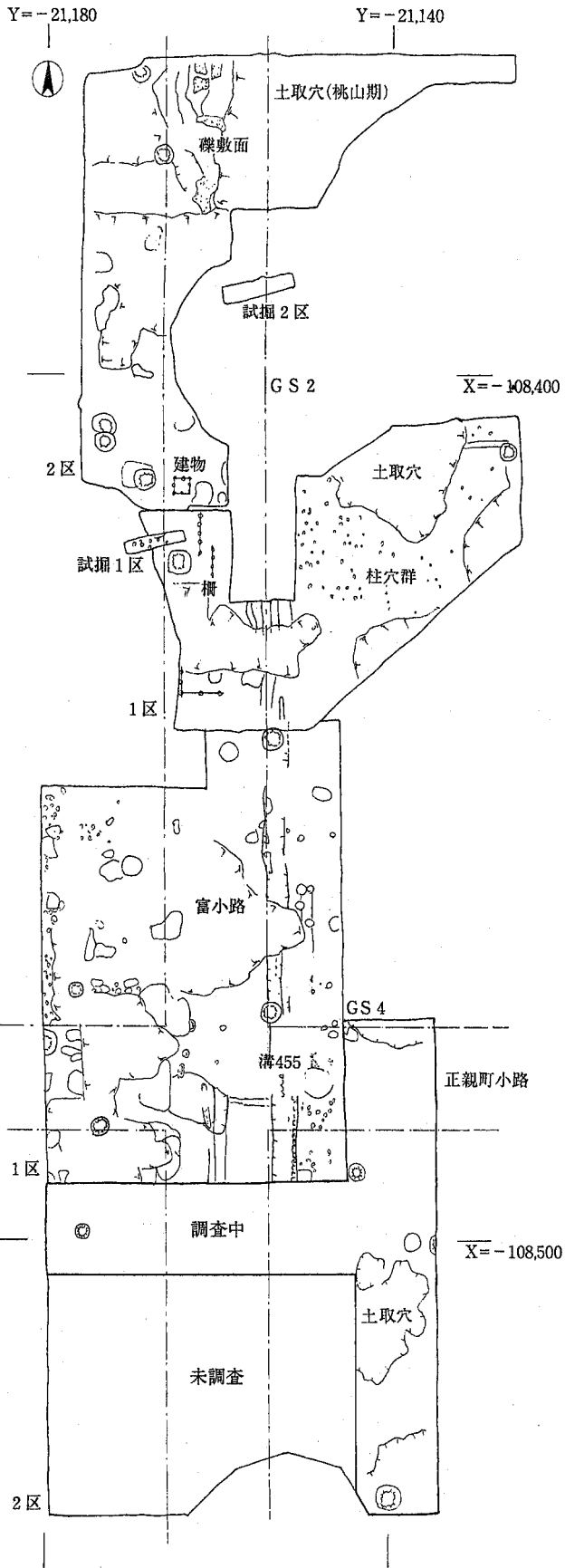


1 江戸時代後半期 (18C前半~19C後半)

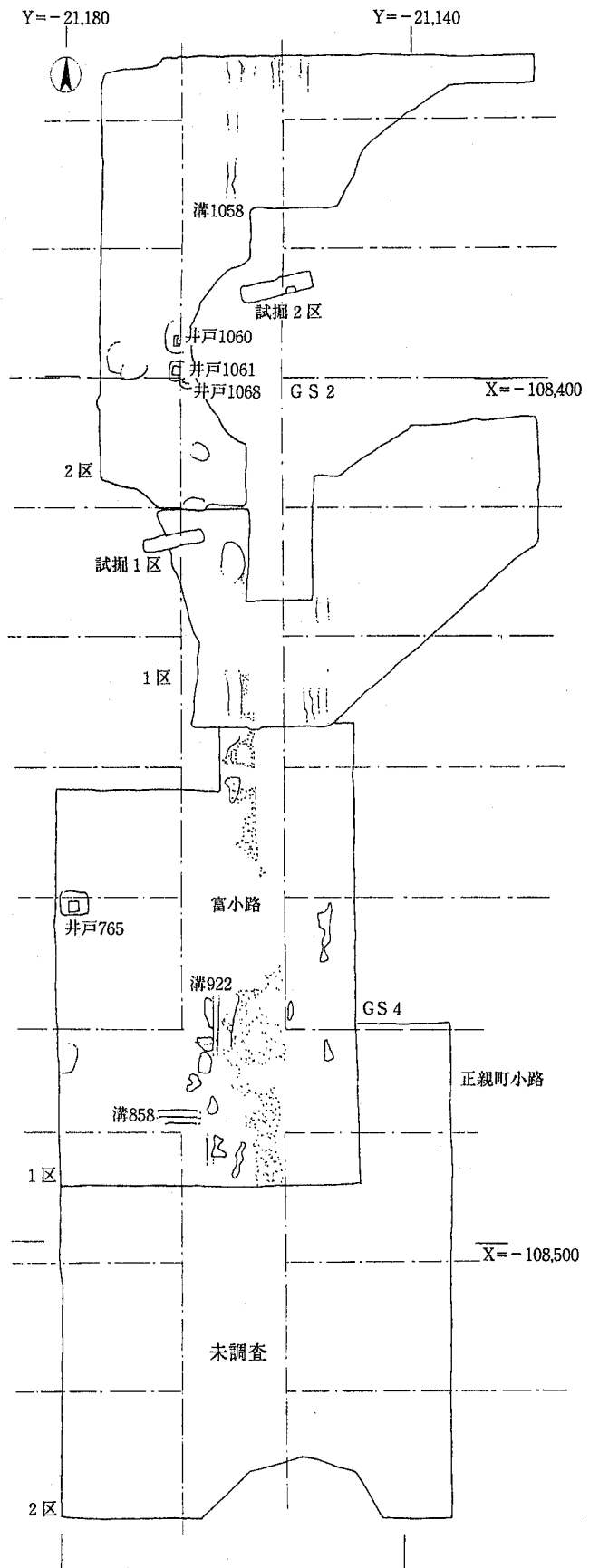


2 江戸時代前半期 (17C初め~18C初め)

図3 遺構の変遷図 (1:800)



3 室町時代後期 (15C~16C)



4 平安時代中期・後期 (10C~12C)



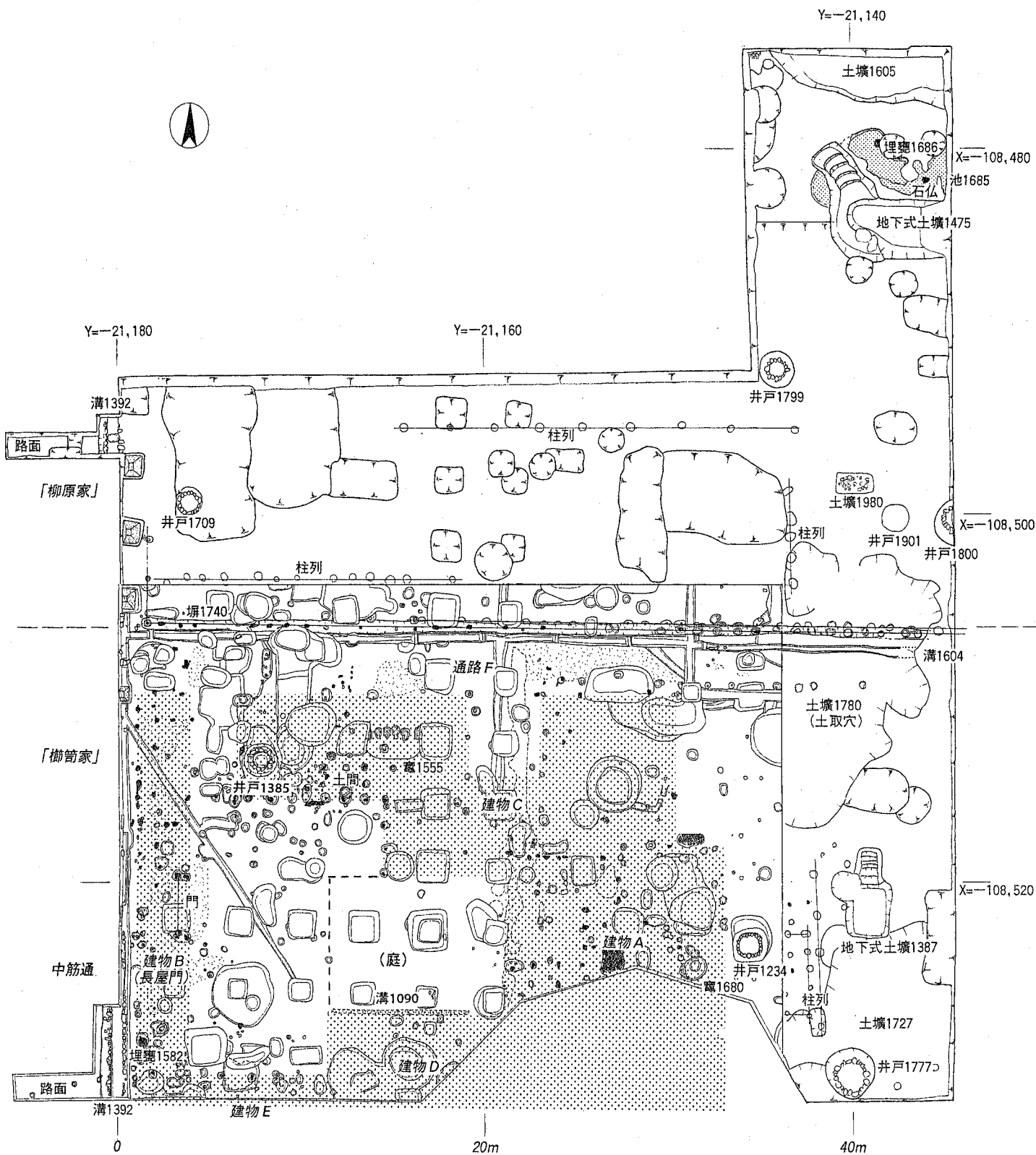
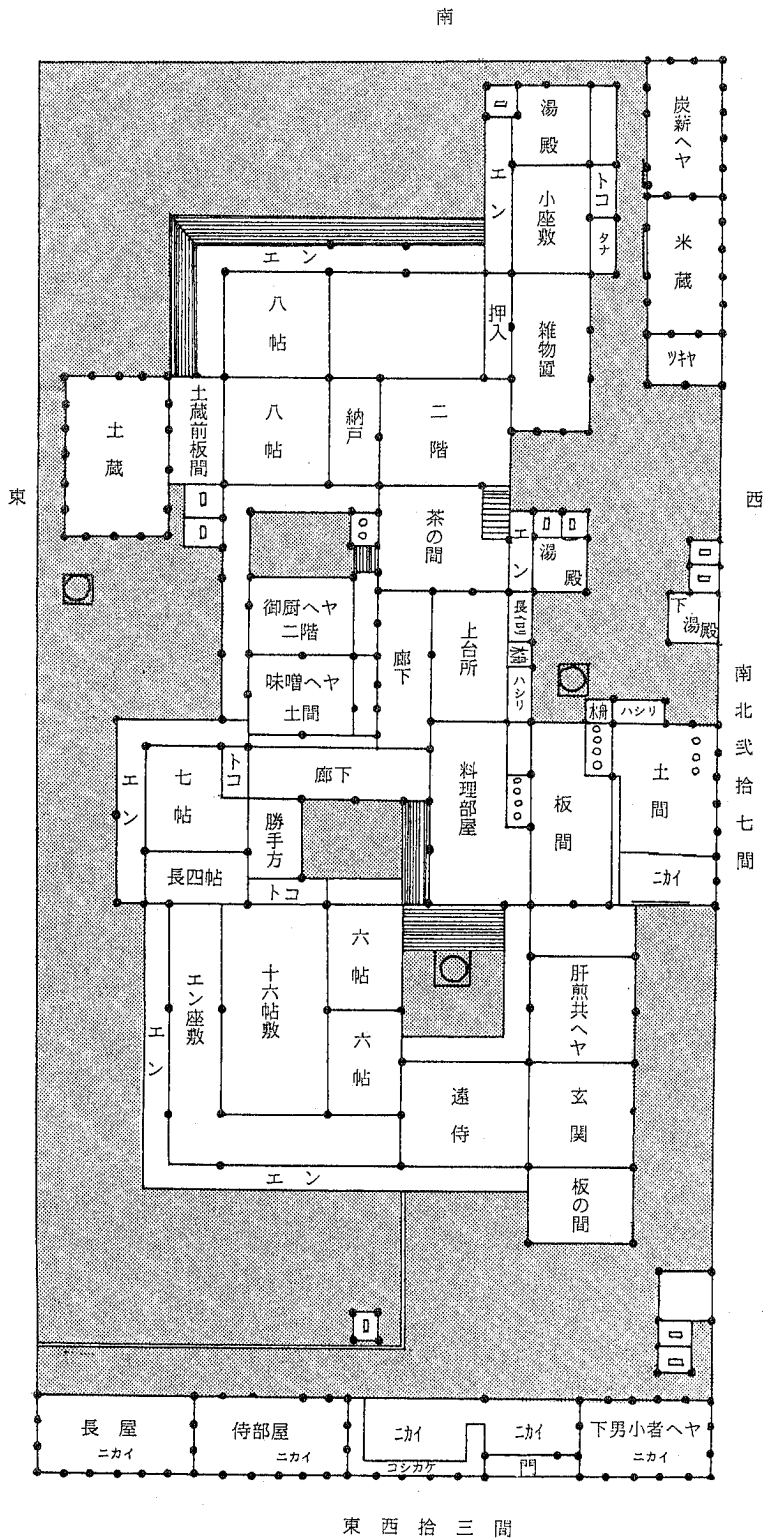
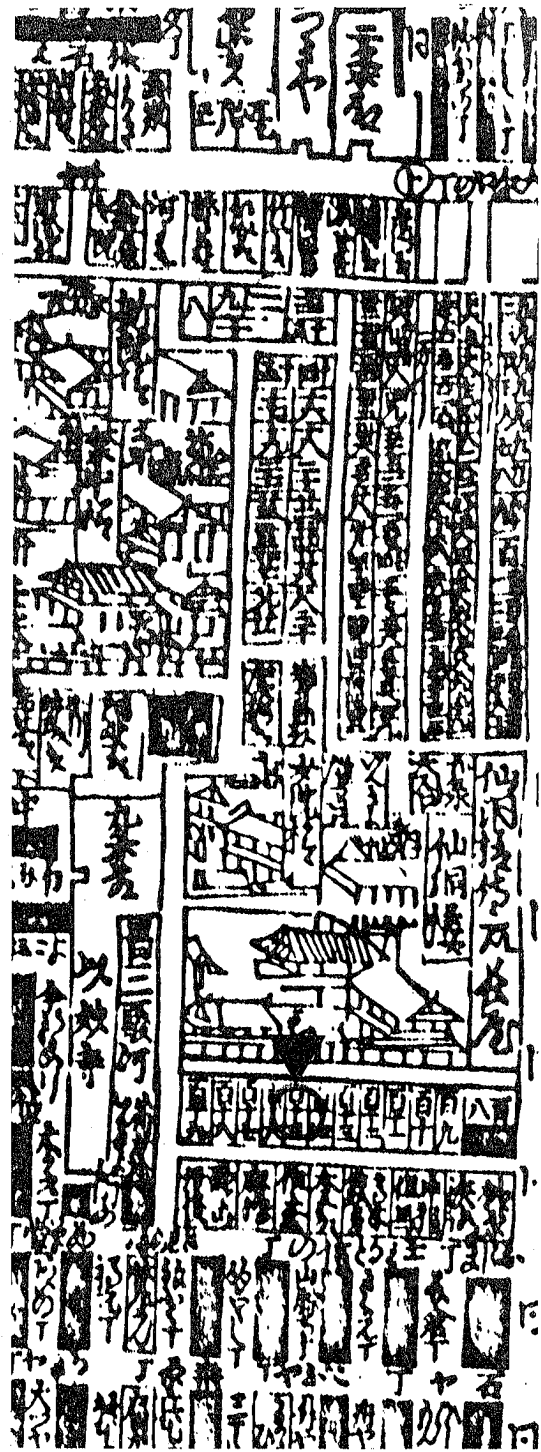


図4 遺構配置図 (1 : 300)



野宮家指図



『新板平安城東西南北町並洛外之図』  
寛文二年（1662）刊

【野宮家屋敷】

- ・ 仙洞御所の南に隣接する。
- ・ 野宮家は藤原北家、花山院流で、江戸時代初期、花山院定熙の次男忠長（1588～1622）に始まる。羽林家200石。
- ・ 屋敷図は寛文年間頃。
- ・ この図は旧中井家文書（京都府立総合資料館蔵）の内にある。

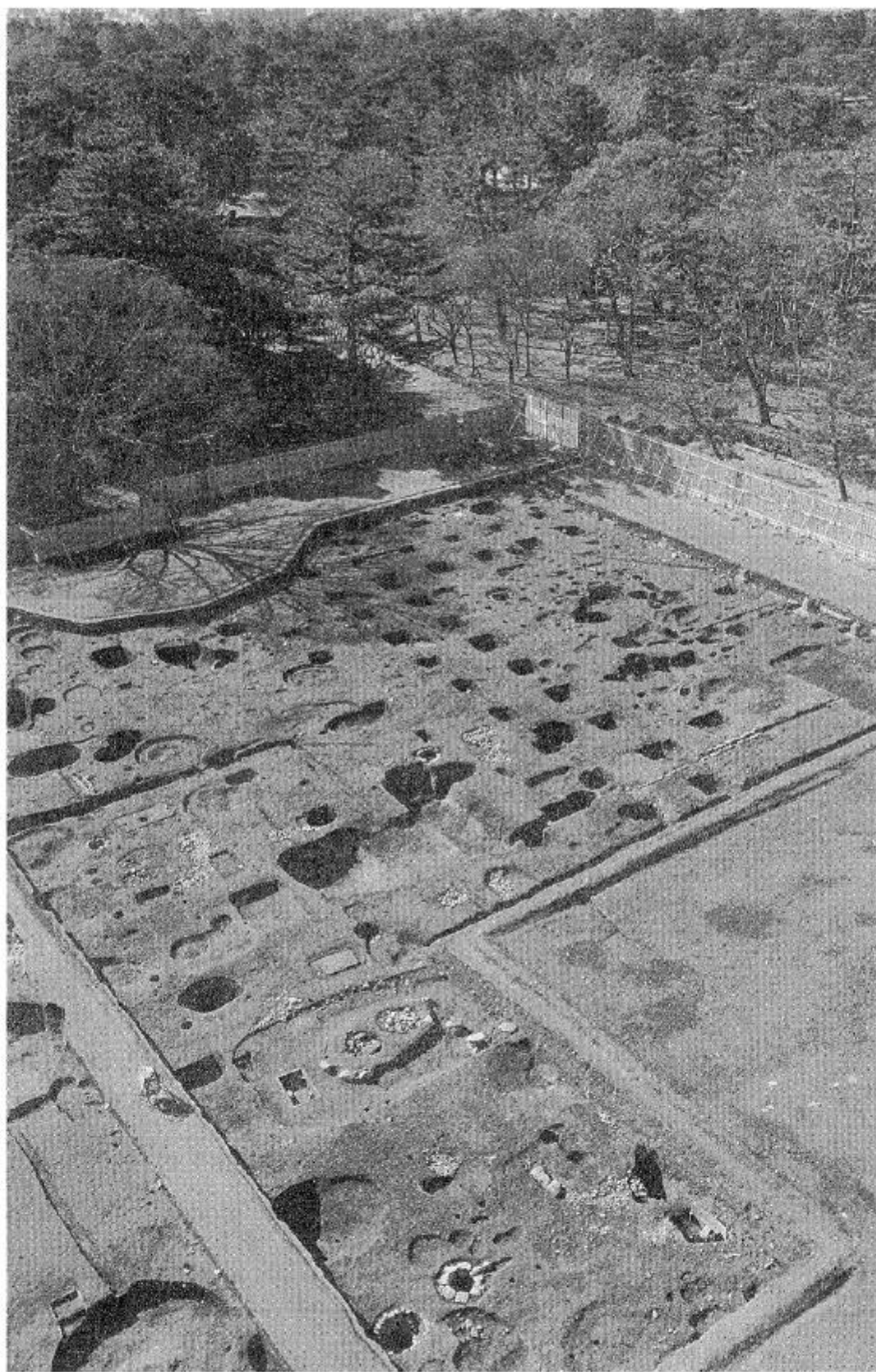


写真1 調査区全景（江戸時代後半期、北から）

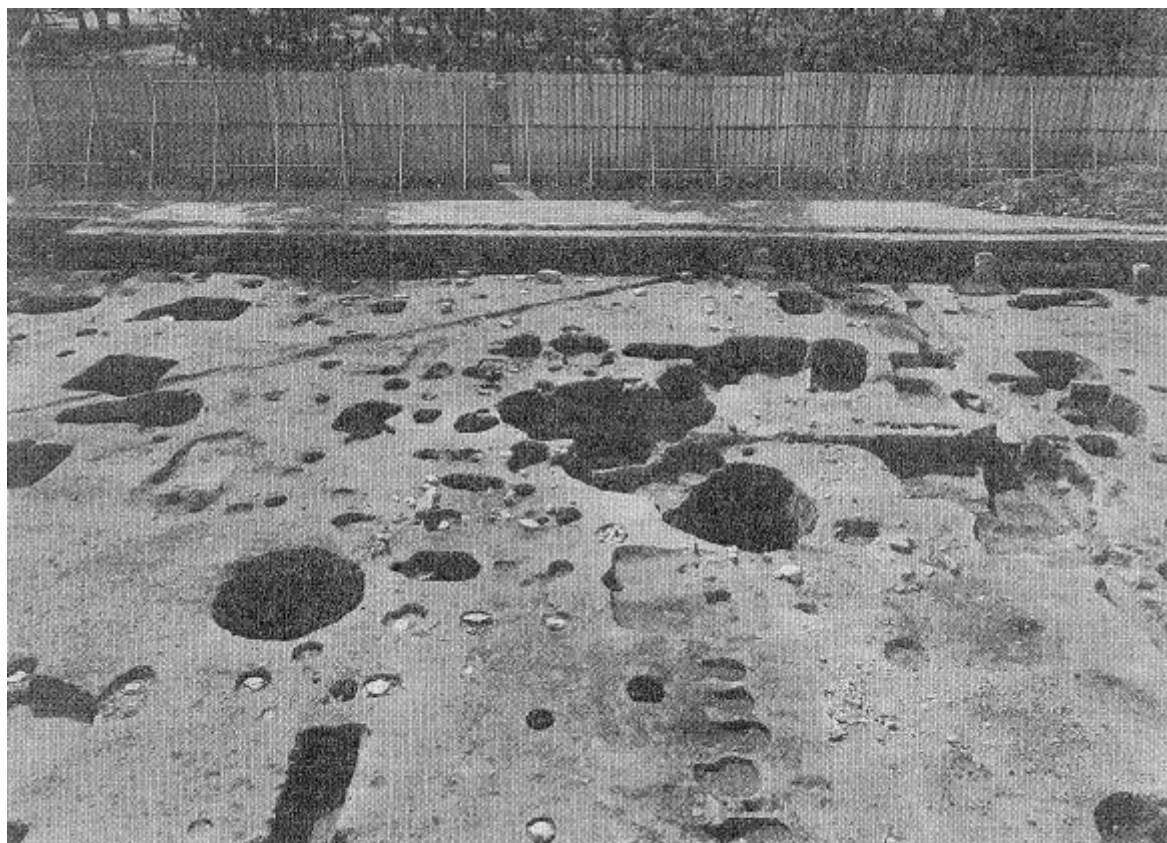


写真2 建物Cと内部の竈1555、奥は建物B（東から）



写真3 建物B（長屋門）と中筋通の東側溝・路面（北東から）



写真4 建物A（北から）

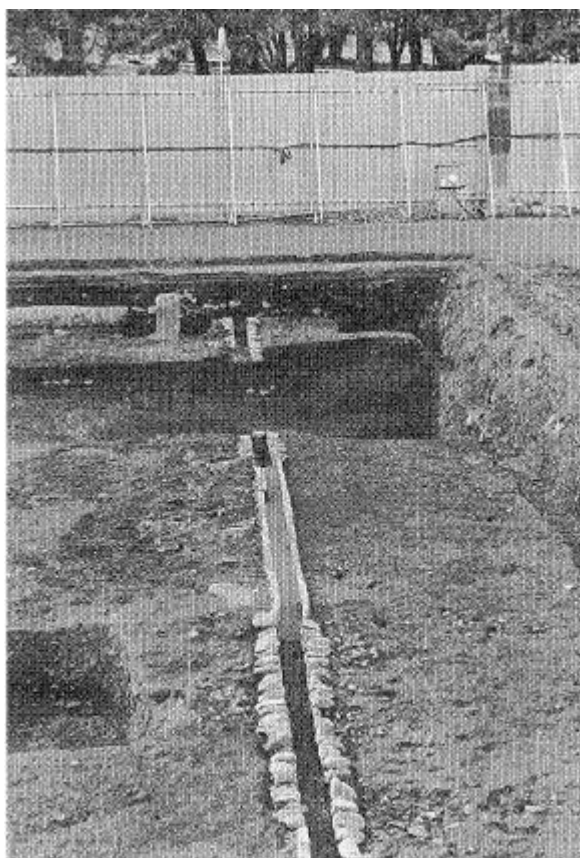
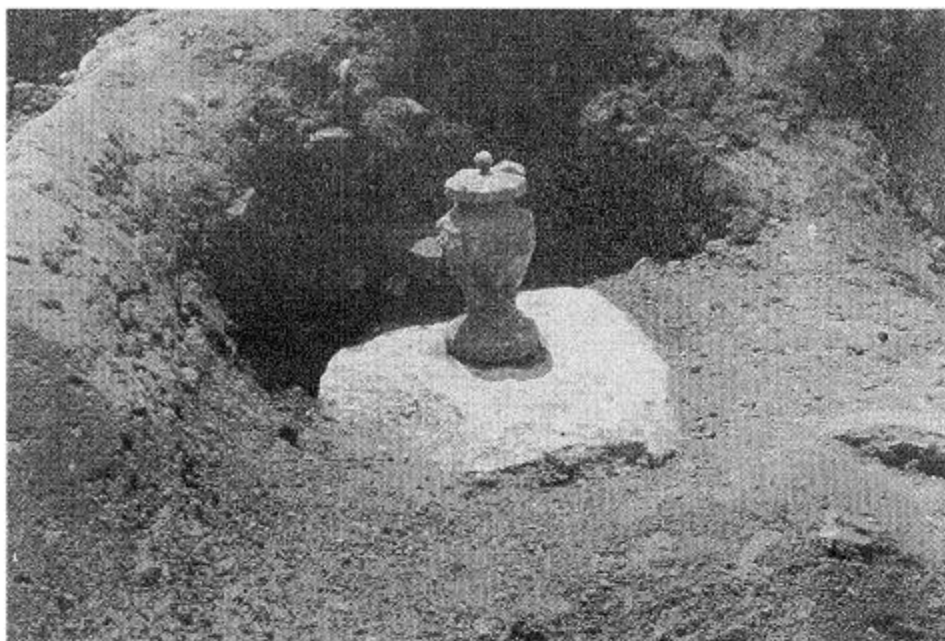


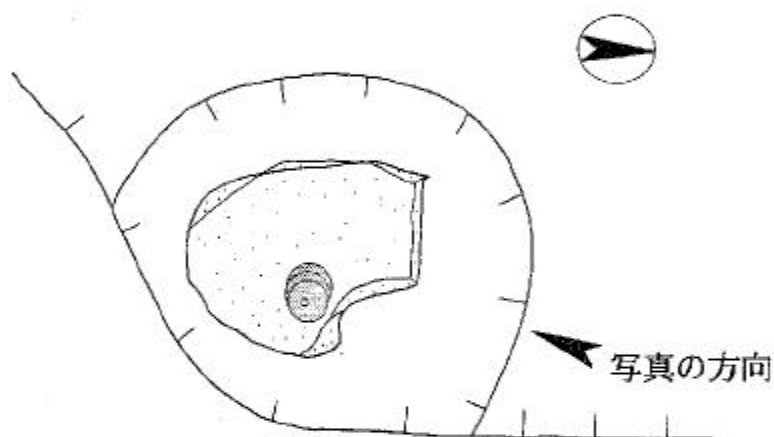
写真5 溝970（東から）



写真6 堀1740（東から）



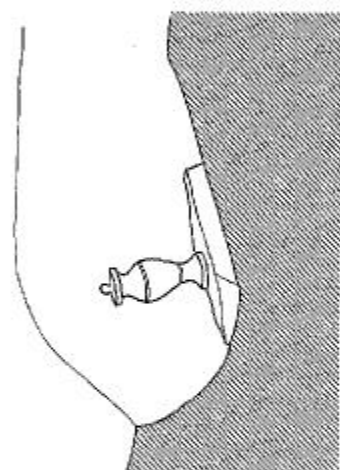
賢瓶出土状況写真



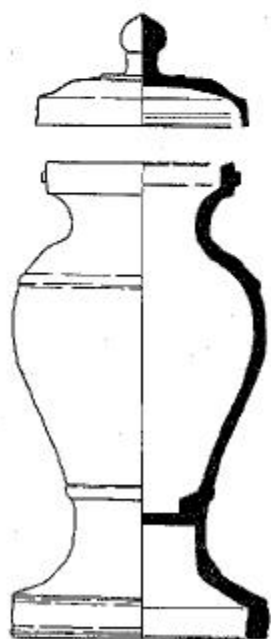
平面図

賢瓶出土状況図 (1:20)

H=50.00mm



立面図



賢瓶実測図 (1:2)

賢瓶の寸法と重量

蓋 高さ 2.8cm 口径 5.7cm 重量 70g

胴体 高さ 12.4cm 口径 4.9cm 重量 550g

全体 高さ 15.3cm 重量 620g

埋納物

五寶 真珠 (38点) 水晶 (3点) 象牙 (1点) 金箔粉

五穀 米 (粉・12粒) 麦 (約25粒) 豆 (約65粒) 胡麻 (約390粒)

紙 埋納物を包んだ和紙 (3点)  
繊維はコウゾ (楮) を使用。

五葉または五香・・・調査中